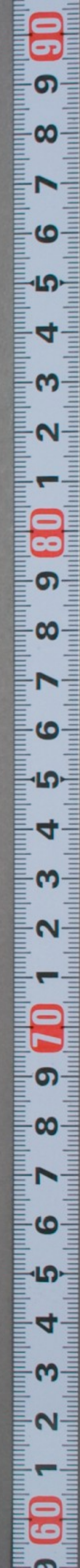


中村俊定文庫  
文庫 18  
432





水之石丸  
ちんちん

雲錦  
一竹藏







Handwritten text at the top of the left page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.



終焉之詞

光陰一時忠夢覺慈母の口の襟あす知事  
の心あふり墨研たう悉れし紙を散る  
懺悔の懽心と意のあやし——惟歳明和四乃  
年丁亥暮毛やをば津路はと——とての終  
あはれを根ふゆあもせんと親——き友飛  
心繋好くまはさるべき物——とて持て  
お旅古より備——とて行李抱——とて







はき紙告り候も其胸は物終肝く古  
と先く形ありきくあき候其は旅客へ  
別れをせししお述べき候意せしに  
ま出候も只二十里候のち千里とある  
ち候し候も其候を其候を母の病牀へ  
ま候し候し候し候し候し候し候し  
きあき候し候し候し候し候し候し  
ち候し候し候し候し候し候し候し

子を濟不終り候し候し候し候し  
うれし時光多らぬし候し候し候し  
海へ申上り候し候し候し候し候し  
乃雜談の事候し候し候し候し候し  
申上り候し候し候し候し候し候し  
乃園園ふ茄子の  
物候し候し候し候し候し候し

子代を其母の命に長茄子



此書付一星をわ祈禱法樂の一句もはほ  
ふり一は種も病なり終やせしころ  
福もあらに討きあふくすし終しこの  
奇方良劑も我こそきれい今更物の涌  
出とあやりに思ひれし悲しき御世  
うぬ子ゆえや深川一おりし暑松辭  
す由ぬるひうあし母も世と生ふん  
法婦やまはりししひさうらうらるる

たまひしはれとんくのめ獲収たやく  
ああししき字終しを昼寝ははき書  
強くつ兜物のもれはゆき駕ふ卑のもろ志  
はるのふ蚌中莽つしはしぬうらそ快山  
祐利仙呂うられは柿柿とこ押あ形の孫と書  
敷を尽しし首病をやはこの思ひしを  
たひよの快復のちうはあまや年をふおひ  
まれとふ代をや新もろはらり諸社の



祿まゝの多賀宮への命乞もみわかれは  
みよみよ母のいのちたゞいせむき  
のまろはゆきゆくまゝの紫のく悲しき  
中よ志母無程に三しう義病苦依慰  
りんとて極し白蓮乃潔く咲出し依中抱  
歎の色やまゝの祿まゝの悟まゝにあはれ  
まはほまゝぬされど身體もくもる衰え難症治  
するまゝなり称名子の唇乃動きまゝ自

若くありせむすも集く人々も念佛お助音  
し亨文月廿二日亥の下剗をのちに長く  
有為は境を辞しし祿まゝのまゝ  
梨いよあゝし一家の歎き何ふの  
とあまき順逆ゆりの中は順あり  
いよまゝの力をよのちのまゝに  
平らに怠り胸も溢き是非は悔乃限  
あゝと瞽者の杖をうしあゝと悲歎の



涙乾く期を哀しく祈りてもあはれとて浅学  
の所望善照すに送りて法おのりしう妙  
を秘せしは是在世の福をいれいたる事  
はこれふにたの福あり此世行ありはたは疾ふ  
まはしかく喪ふさうりゝる事なきは妙  
ありしう行を染るる事なきは思ひ法  
く教をいしう妙しき揚をきりぬる袂  
を哀ふくもぬる事し何れは徳のこころをたひ

捨す茫然とて善し侍りし家にありし  
古来師のきりし妙ありし事此道なきは  
はしきし事し時とて僕ふゆしき  
まのし事し信心獲得の本願  
を叶し事し諸君も喪中紙慰  
状をいし事佳句いし法し事ありし人  
ありし事し狂言綺語三佛衆の因とて  
めれと追悼の小冊いし事ありし事し進



羅毫之佛一向領りて捨香燃華尔添  
秋時刻相應乃古くろくく越あ好くち  
少見ゆゑ一したまふ中菴泰里  
謹而云爾

不可思儀の思乃深き霧の海

母おかく終傳りて

なく聲をふ新や秋乃蟬時雨 久美  
極樂へ多向の法由や益母草 多き  
たふし形き念終を法ふ拂ふ露 之れ  
糸紙を草葉に虫のあふるの形 寺哉

妙説禪居の靈蘇尔呈を

妙尔流蓮子<sup>實</sup>みのわ北ワく終る 快山

無常迅速の境只如夢切法泡影也



さくはれと釈迦説法居あし初

秋下姑二日西方へ赴たまひぬ寔に

佛の御法を尋とあひし今今

手向の云乃養ふ那う也

蓮の実乃花んと手向也西の宮

祐利

文月廿二日正念み火宅を出ぬ

安樂ふ玉ありあふ

あふのや扇の古縁、新為乃園

仙呂

秋風の涼しきや 西乃の 都香

ワカサキのや若荷の花哉手向の毛 鳥皮

七月廿二日娑説信居極乘往生とゆふ

凡菘子れ疾るあり 終忠旅 呼童

持のまゝか観音州哉手向の那 南峨

あはれをゆに見ても涙の益母子 嵩里

稲妻始くとも西へ消ふり梨 野松



親しき尾君乃力満のまゝあふ

秋もむきもいづれも松

尾 妙清

先きの内意誓ひ無おれし夜の辺乃  
風成るはなれ秋のまはれば

佛前つま向まゝて

空あはれぬ若のやうさく秋乃多 道無

釋

くく先の秋多うちめにあれ  
人を悼む

涙くせぬ意満く秋く先総固解 樓川

後漢の世も四人姉兄弟あま一布

被を作さずこれあともなきをの

く孝子の名あ繁たれ無分貞家

あまうこれも富家あり

四隅あまうちなきあう次く人秋の嘯 全

あまの涙のちく秋も向や朝ふく 雞口

秦里子の古れはや母君ふおくれ



愁淡の扉を志先おら次を初ひま  
ゆり掛んぞ例の物侍のまをや  
お  
くか

喪に籠敷人のうほや西務印え 圖大

左庄の力満のあやう

蓬の實乃泉ふ帰るや 西忠方 温克

魂むうふをうとに色しおれさせ 田井

ふも月の未片く 蚌中庵の娘

喪に籠くはは僕毛ぬはきん

郎亭心の外子討そまう

理言やはるり

夢の世和きのふりふたふ生かん魂 可因

泰里の娘しり 丑堂の力満のま

り新や同を

逢くぬ旅散くし川初あらし 逸志

春里お娘し 北堂秋思いふ



傳々伝訊の事

乃平の門の杖越えりや愁乃字 葵足

此法居りてあり婦徳備り夫お

仕る満りやうお孤を施をさるるさ

越失い寸分の形も去の善同少也

家の事多きゆゆもさるるあり子孫さ

あつるにほほしくお奴婢おしはの

れく勤ふ老を暮らひおしは又月

を侍るにあふるに二りふりてを

よりおつるされく現在の果をえん

未来越知るゆゆを今もさるる

先とて人の待まらるる人達の

臺の半に坐りて成佛得脱るる

ゆゆもあしゆゆもさるる

益を無きあつるる家お祈りて存義

喪中越祈り



あき運多脊戸少をあきし虫の声 全

古来菴来り泰里母の追福り

句を今ふゆし宗音を尋る以て

其言は越述懐るのこ

法わあ行為の初ま終ふまおと月 李井

文月廿二日恭賀母の力南のりる

少伊多

灯笼故晦日まそ先次おれう那 守愚

はつきゆあまそ見んか多灯笼 理珉

月尺燈も余所のりあをあまの物 泰郷

常くは教り辭も今さあや

にそあ思ひ中かあ喪りか

北る人の心越ねしそあ

行秋子初年あはしゆ蜂乃壳 如英

兼虫乃音をさ持し初あし 湖天



空憚の陽也不帰也きりく寸 關月  
 寄寄不事足之多り也 蒼 存登  
 厚の世多遠く事近し霧一重 連馬  
 昼多蚊の去り此の轉る灯籠の影 閑義  
 啼くは声あり積る梨秋の悖 玄兔  
 秋も風たうも芭蕉を破れまし 和水  
 招くを返くぬき也 甚 去る事 昆那  
 寄るま此風も少く羅也 法乃声 阿誰

魂棚學多物さくき 灯籠の那 五絃  
 秋茄子只一口世も 手向く羅 掩里  
 芭の散る詔を句ふや 秋乃蓮 百拵

泰里哲士の慈母もおとせられし

秋の事三口一紙の悼

秋草枯あけしき芭にあらる 簑笠  
 秋長き紙侘し人虫の色さる年 波文  
 喚く形もく力に無風乃末 桑國



泰里子の慈母身よりるるヤサレ

如現住の菊花極樂往生

多の形あり

歩秋乃樂やあのみく夏嘸し 李丈

色哉の世ふや虫乃幄古く里 雀志

泰里兄の慈母共喪を吊す

海山のききええと初き一たの形 李蹊

初汐や浮藻の中ふ初乃色 大來

昔のや海々如娘哉おの月 治常

うち昂灯籠ふ歎く申ふ我 圭橋

あれ世もくまの王哉照く寸老母州奉 柳志

新盆の情や他人志くまを意 伏牛

挨拶乃礼ふ六字を唱あう那 其丈

喪を初めや葉内哉乞く鉦蚓幄 芝莚

後より更けり月や阿彌陀笠 雨足



母の喪ふ發此の人哉とむる

り家千古人の懐をたもむ

此の礼字

照る月愁康なるは琴弾ん 慶夕

恭里の亡母を悼む

懐乃恩哉おりのは礼字し 書香

泰里の悼ふも

遠目く余所のありれや言灯籠 仙露

喪ふ入る人の海へも海へ

来る響く音信もあき何れも 不幽

秋の来て扇も骨も来たり 鯉藤

立の用多終り煙も常志者 來至

繩風ふ飛ぶ阿彌陀乃定雲 東紫

墨露も目く記す此候の如 玉蛾



秋風小寺乃 案山子の坊主 那 春藤  
遍系僧 揚室き 柚味暖く 塵匣

力あは花の跡を種 葦河草 珂舫

今物考亦扇おく ちり墓の 文 麟

なき人 ちり ちり ちり ちり 言 海

調和 ちり ちり 世乃 ちり 金 岷

小車 花を ちり ちり ちり 雪 牙

福金毛 法 ちり ちり 法 乃 雲 路 榮

物 影 ちり 今 意 悟 ちり 人 寺 暁 雨

雨 ちり ちり ちり ちり 破 芭 蕉 溪 雨

心 ちり 汲 人 水 ちり ちり ちり 岡 伽 乃 桶 祇 蘭

消 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり 文 魚

極 樂 ちり ちり ちり ちり ちり 月 令 堂



亡詠毛 名のそふ若事此 西居 正川  
魂柳や 年以稀 ちり亭 閑江  
手向うや 踵ま ぬこ 虫の声 惡機  
菽豆の花や むらき 西乃 待笑  
蓮の實乃 能行 喜見 城 桂瓦  
古の雨に 今残む 庭の 萩 牛刀  
新涼の 切萩の 総志 慎我

萩を吹風の 多し 架や 西流 菊旦  
そよめ 世哉 たり 掛と 世の 壁 万照  
誰為 小織 機か 吹出 聲 俵鬼  
亡詠乃 念此 下や まり 曾嵐

物影や 西流を 花雀  
袖より 鳳洲



静尔秋暮如の月此を我 沈ん 鉄突

秋〜トキ塚を我さる船 暮糸 笠亭

種あり消つ 燈火々々 灯籠 梅笑

擊おくまや脛も言 露を叶の露 友松

露志も亦小秋うき心あめ 秋 楚江

嵐尾草のむ〜きききき 西の雲 五亭

云人哉 秋思ひや 秋 五卿

才の形〜如秋の胡蝶 古人の了〜 翠如

閑伽楠や水も〜 秋 秋 秋

古古にぬ〜 秋 秋 秋

雨も又 秋 秋 秋 蘭江

む〜ききき 野山のるるや 西の空 撰八



虫の音 秋 清 小 深 傳 く 名 跡 之 那 寸 虫

之 此 切 い け ち ち 花 の 咲 く 茄 子 ち ち 蓮 佐

秋 の 束 ち ち 解 交 ち ち 多 向 の 那 東 調

ち 束 編 ち ち 在 け 世 の 町 ち ち 越 耕

秋 茄 子 晴 ち ち ち ち 瑠 理 佛 竹 史

余 雨 ち ち 風 肌 ち ち 一 葉 の ち 文 谷

極 樂 の ち ち 乃 志 ち ち 此 灯 籠 茶 全 前

百 日 の 難 ち ち 意 厚 ち ち 氷 之 那 荊 陽

秋 乃 ち ち 積 只 ち ち ち ち 年 友 ち ち 祥 象

悉 礼 ち ち 吾 念 佛 唱 ち ち 磬 の ち 花 磔

ち ち 悲 淚 秋 ち ち 備 ち ち ち 余 亦 目 ち 右 眼

涑 佛 の 道 ち ち 悲 苦 雲 ち ち 秋 の ち 岷 水

物 ち ち ち ち ち ち ち 西 ち ち 魚 溪

丑 堂 の 悼 ち ち ち ち ち ち

他 人 ち ち ち ち ち ち 秋 ち ち 風 六 器



山里琴瑟アを降一歎 菌小田原露貫

人の身は灯消くハ初あし 河東

柝あゝ庭乃梢也 雨露志 思 汝洲

夢うらみ啼をあり 穉や ぬる虫 蘭洲

目ふふと 袂巻 泣露を 古のゆゑ 蘭雨

世の中は 眠さるき 秋乃 穉 河洲

了次煙さる 舟き 魂志 故や あり 秀二郎

白雲の 敬慕や 他人を 袖 袂 新二郎

嵐尾 草や 多向の 水を 雲は 色 因齋

在 春の 山を 露を 踏き 塚の 前 蘭秀

まじりきし 佛ふ あり 昔も 心を

法 の 法 午 時 小 さい たり といふ 哉

善知識 と あり 霊床 亦 備ふ

みし 糸 帯 亦 あり くれ 古 染 志 露 餐 英

釋





野梅英圖





二十あるは四一ありは孝子を題ふつゝも  
言二十餘より四乃名家の句依乞慈母  
追禍志集のかさありあかか次く  
志ふか繁

大舜

桃園や象を束々拙む夫の徳 存義

文帝

親腕の自他とおもひ難きもの形 買明

老萊子

古海ふ事二度おほしな程益太報 構川

関損

ワ移定く人平嘯聲字法と成し 百萬

曾参

親指哉斧化志ありや 年亦携 雞口

丁闕

為瘡や子はささす 志心と成 祇丞







吳猛

收之志寸寸轉々々々採之毒之形 可因

仲由

負之志寸寸恩のままさん 新 俵 常仙

庾黔婁

晨北おれく多結々の形の亭 金洞

陸績

楊成りく言落次 為の形 逸志

王褒

昼元收のお執の法らぬ 墓とらり 葵足

蔡順

遠くぬ髪熟と一桑の耳々の様 古朋

列子

手向ぬし露毛乳房も麻名も子 菊堂

董永

織繰千り形も天は多さるものか 雲柱



姜詩

実賢、以ふ備ふ、あふは、泉の如く、白頭

黄庭堅

清く洗ふ、形、和、厚き、恩報、水鏡

歌仙

親無ふ、化、繁、や、や

會、寄、化、他人、迹、を、礼、秋、の、と、禮、存、義

孝、を、ま、ら、む、侍、ある、し、ま、る、月、泰、里

初、宿、を、五、位、の、斗、を、夢、見、ま、る、て、樓、川

雨、の、間、張、出、船、呼、お、な、ま、義

緝、あ、る、ま、詭、え、ま、た、く、平、清、み、里

家、報、無、く、の、字、に、嘆、く、孝、庵、の、名、川



田<sup>ウ</sup>雨<sup>ウ</sup>と云<sup>ウ</sup>油断<sup>ウ</sup>のあ<sup>ウ</sup>ぬ蛇<sup>ウ</sup>行<sup>ウ</sup>  
 行<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>は<sup>ウ</sup>満<sup>ウ</sup>守<sup>ウ</sup> 庄<sup>ウ</sup>乃<sup>ウ</sup> 即<sup>ウ</sup>ち<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>次<sup>ウ</sup>  
 鹽<sup>ウ</sup>賣<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>赤<sup>ウ</sup>穂<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>母<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>一<sup>ウ</sup>物<sup>ウ</sup>語<sup>ウ</sup>  
 平<sup>ウ</sup>氣<sup>ウ</sup>忠<sup>ウ</sup> 劔<sup>ウ</sup>平<sup>ウ</sup> 大<sup>ウ</sup>根<sup>ウ</sup>糸<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>那<sup>ウ</sup>  
 松<sup>ウ</sup>陰<sup>ウ</sup>小<sup>ウ</sup>竹<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>社<sup>ウ</sup> 飲<sup>ウ</sup>杖<sup>ウ</sup>突<sup>ウ</sup>亭<sup>ウ</sup>  
 軍<sup>ウ</sup>乃<sup>ウ</sup>博<sup>ウ</sup>尔<sup>ウ</sup> 志<sup>ウ</sup>濃<sup>ウ</sup> 落<sup>ウ</sup>人<sup>ウ</sup>  
 欲<sup>ウ</sup>強<sup>ウ</sup>ま<sup>ウ</sup>て<sup>ウ</sup>思<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>如<sup>ウ</sup>知<sup>ウ</sup>ん<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>時<sup>ウ</sup>  
 佛<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>康<sup>ウ</sup>多<sup>ウ</sup>此<sup>ウ</sup> 心<sup>ウ</sup>學<sup>ウ</sup>あり<sup>ウ</sup>札<sup>ウ</sup>あ<sup>ウ</sup>祭<sup>ウ</sup>  
 里<sup>ウ</sup> 義<sup>ウ</sup> 川<sup>ウ</sup> 里<sup>ウ</sup> 義<sup>ウ</sup> 川<sup>ウ</sup> 里<sup>ウ</sup> 義<sup>ウ</sup>

新<sup>ウ</sup>が<sup>ウ</sup>も<sup>ウ</sup>悔<sup>ウ</sup>ひ<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>近<sup>ウ</sup>笑<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>ほ<sup>ウ</sup>日<sup>ウ</sup>  
 京<sup>ウ</sup>乃<sup>ウ</sup>長<sup>ウ</sup>持<sup>ウ</sup>忠<sup>ウ</sup>好<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>友<sup>ウ</sup>了<sup>ウ</sup>  
 科<sup>ウ</sup>筒<sup>ウ</sup>金<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>板<sup>ウ</sup>行<sup>ウ</sup>出<sup>ウ</sup>才<sup>ウ</sup>亨<sup>ウ</sup>意<sup>ウ</sup>了<sup>ウ</sup>  
 始<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>老<sup>ウ</sup>お<sup>ウ</sup>ち<sup>ウ</sup>一<sup>ウ</sup>先<sup>ウ</sup>如<sup>ウ</sup>眼<sup>ウ</sup>鏡<sup>ウ</sup>  
 湯<sup>ウ</sup>少<sup>ウ</sup>も<sup>ウ</sup>い<sup>ウ</sup>狂<sup>ウ</sup>言<sup>ウ</sup>舞<sup>ウ</sup>子<sup>ウ</sup>和<sup>ウ</sup>了<sup>ウ</sup>  
 福<sup>ウ</sup>ん<sup>ウ</sup>あ<sup>ウ</sup>ふ<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>や<sup>ウ</sup>一<sup>ウ</sup>園<sup>ウ</sup>子<sup>ウ</sup>釣<sup>ウ</sup>る<sup>ウ</sup>懶<sup>ウ</sup>  
 津<sup>ウ</sup>川<sup>ウ</sup>登<sup>ウ</sup>崎<sup>ウ</sup>布<sup>ウ</sup>と<sup>ウ</sup>才<sup>ウ</sup>次<sup>ウ</sup>部<sup>ウ</sup>小<sup>ウ</sup>堂<sup>ウ</sup>  
 あ<sup>ウ</sup>満<sup>ウ</sup>心<sup>ウ</sup>遊<sup>ウ</sup>乃<sup>ウ</sup>飽<sup>ウ</sup> 初<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>娘<sup>ウ</sup>  
 川<sup>ウ</sup> 義<sup>ウ</sup> 里<sup>ウ</sup> 全<sup>ウ</sup> 川<sup>ウ</sup> 里<sup>ウ</sup> 義<sup>ウ</sup> 川<sup>ウ</sup>



日の教乃其石盤忠目より口より  
藪の研粍 寺然 煤取  
百石の田を秣場も雪忠 原  
尔尔臥し 寅午起る 孝行  
お<sup>棒</sup>んぬる 杖の行手 同尔本读を  
地を辰しに 沸し 一教秋  
濃枿のりん せき流る 龍池乃月  
栗荒のたやきを 森流 縮妻

義 里 川 義 里 川 義 里 川

赤菘粍 喰ふ 苦根子 世根 親し  
木偶尔 似る あり 伽よ みる 痴  
塵高紙 抄物 替尔 望ま 礼て  
井多志 名を 傳ふ 爰に 茶 割  
父の又 又 杖の 父乃 植し 花  
園忠 あり とも 孫生 心 也 ち 以

川 里 義 全 川 里 川 里



もういふやうにやがみ月来れ二日  
係絶の法園れか運成得  
妙説弾危の自由種と書と書との  
か御事成をふ孝子をふは流一流  
れ同朝山し力成松風の多不  
くたれ奇一浅草の厚く思  
かちあふりこそゆれさ果の中  
風雅のる書よのほく深川の



あまのなごのたぐひのまゝに解と  
かゝる意にせしは、いふに、あまのなごの  
らぬまゝに、あまのなごのまゝに、あまの  
あまのなごのたぐひのまゝに、あまの  
あまのなごのたぐひのまゝに、あまの

明治二十一年丁亥九月廿八日

長瀬房  
樸川

あまのなごのたぐひのまゝに、あまの

あまのなごのたぐひのまゝに、あまの

あまのなごのたぐひのまゝに、あまの

あまのなごのたぐひのまゝに、あまの



